

能動知性とトマス・アクィナスの 「経験主義」(要約)

稲垣良典

「経験主義」を本有観念ならびに「表象なき思惟」の否定、という意味に解するならば、トマスの認識理論のうち——とくにプラトン派(Platonici)との対立において——経験主義の要素が見出されることは明白である。さらに「経験主義」を感覚的経験の明証を重視する哲学的立場ないし態度と解する場合、トマスがこの意味においても経験主義的傾向を有していたことはかれの著作から明らかに認められる。しかしながらこの意味での経験主義はあえてトマス的と称するには足りないであろう。

ところで、一般にトマスの能動知性説は経験主義とは対立的な性格のものと考えられている。それはむしろ認識におけるアプリアリ・形相的要素であって、感覚を通じてえられた対象の類似像という素材とあいまって、認識のための必要条件を完成するものとされる。別の見方をすると、能動知性は認識の必然性もしくは絶対的確實性を基礎づけるために措定されるもの、と考えられている。

しかしながら、トマスの能動知性に関する所説を詳細に検討すると、それを経験主義に対立する意味でのアプリアリなものとして解することは適切でないことがわかる。むしろトマスにおいては、経験についての徹底した省察によって、すべての経験が根源的な「存在」の経験を予想し、それに還元できることがあきらかにされている。そしてこの「存在」経験の成立のためには能動知性と呼ばれる能力が不可欠であることが示される。いいかえると、われわれは経験についての省察を深めてゆくことによって「存在である限りにおける存在」という観念にゆきつくのであるが、この観念は必然的に能動知性の働きを予想する。したがって、トマスの「経験主義」は存在の経験という立場から理解すべきであり、かれの能動知性説はこの意味での経験主義の枠内で解釈すべきだ、というのがこの小論の主張である。

能動知性の働きとは、可能的に可知的なる対象を現実的に可知的ならしめることであるが、トマスはこの働きをふつう「抽象」と呼び、また照明にたとえている。この「抽象」「照明」という表現は、それ自体では能動知性の働きを解明するものではない。ところで、一部のトミストに見られる、能動知性の働きを神秘化する傾向に反して、トマス自身は能動知性の働きはわれわれによって経験される場所である、とのべている。したがってわれわれは或る具体的な認識に省察の眼を向けることによって、能動知性の働きを理解することができよう。ところで能動知性の働きは知的認識を成立させる必要条件であるとされているので、まず知的認識のうちでもっとも原初的かつ根源的なもの、すなわち「存在」の認識に目を向けるべきであろう。

存在の把握においてはつねに二つの要素が見出される。すなわち、われわれはつねに所与の事物について「或ること」、つまり広い意味での本質ないし何性を把える。しかるにこの「或ること」は、それをわれわれによって把えられることの可能な実在たらしめている、もう一つの原理を予想する。すなわち、それが「或ること」として、つまり限定として把えられているということは、それ自身においてなんらの制限もふくまないものを予想し、「或ること」はむしろそれを制限する原理として理解される。「存在である限りでの存在」「存在そのもの」の把握は、事物がこのように「或ること」「本質」という限定を超えて把えられることを指すといえよう。トマスはこの本質を超える原理（完全性ないし現実性）を *esse* と呼んでいる。

この存在把握——ここで把えられているのはあくまで具体的なものであることを注意しておきたい——において、その本質的、可知的内容が感覺的経験に由来することはいうまでもない。しかるに、この本質がまさしく本質としての実在性を与えられるのは、*esse* を受取ることによってであり、この結合によってはじめて本質は可知的となる。したがって、人間知性が事物の本質を認識しようということは、人間知性が *esse* へと到達する能力をふくむことを示すのであり、現実になわれわれは人間知性による存在把握に省察を加えることによって、かかる能力（能動知性）の働きを経験的に確認できるのである。

トマスによると、認識とは本来、非質料的な存在が、まさしくその非質料性のゆえに、自己に完全に立帰り、自己のうちにとどまることを意味するのであるが、人

人間知性が認識を遂行するためには、まず自己の外に出て、しかるのち自己に立帰って自己を認識するという順序をふまなくてはならない。なぜなら、人間知性は認識しうる能力（可能知性）であるが、いまだ現実に認識されうる能力（現実的な可知性）ではないからである。したがって人間知性はまず可知的形相をつくりだし（これは能動知性が感覺的表象の助けをかりて遂行する）、これを受取ることを通じて自らを現実的に可知的ならしめ、それによって認識の条件を完成しなくてはならない。この意味で能動知性は、感覺的表象（したがってまた肉體）への依存とならんで、認識の人間の条件（すなわち、經驗的認識）を構成するものと言うべきであろう。